千葉商大紀要　第57巻　第3号（2020年3月）pp. 268-276

〔論　説〕

源氏物語と古事記神話（四）

杉浦一雄

目次

十二　渡り川
十三　女性を背負うというモチーフ
十四　琴の音
十五　新たなる正妻

十二　渡り川

玉鬘が鬚黒大将によって六条院から奪い去られることになる数か月前、光源氏が六条院にある玉鬘の部屋をおとずれ、諦めきれない恋ごころをほのめかす場面がある。すでに鬚黒との結婚が本決まりとなり、〈玉鬘求婚譚〉が一応の決着をみせるようになった矢先、このまま他人のものとして手放してしまうことがいまさらながらに悔やまれる源氏は、玉鬘にむかって次のような一首を詠みあげる。

おりたちて汲みはみねども渡り川人のせとはた契らざりしを

（『源氏物語』「真木柱」の巻）（1）

〔現代語訳〕おりたちて……（あなたとは立ち入って親しい仲にはならなかったけれど、あなたが三途の川を渡るとき、まさか他の男に手を取らせようとは約束しなかったのに）

ここに「渡り川」の語が詠みこまれている。

この「渡り川」について、辞書類は次のように記している。

「三途（ずさん）の川。」（大野晋・佐竹昭広・前田金五郎編『岩波古語辞典』）（2）「（死後必ずそこを渡ってあの世に行く川の意で）三途（ずさん）の川。」（中田祝夫・和田利政・北原保雄編『古語大辞典』）（3）「死者が彼岸に行くために渡る川。」（秋山虔編『王朝語辞典』）（4）、北山谿太氏の『源氏物語辞典』には「みつせがは（三瀬川）に同じ。」とあるため「みつせがは」を引くと、「死して冥土に赴く途中にありといふ川。」（5）とあり、『広辞苑』には、「「三途の川」に同じ。」とあるため「三途の川」を引くと、「人が死んで七日目に渡るという、冥土への途中にある川。川中に三つ緩急の異なる瀬があって、生前の業の如何によって渡る所が異なる。川のほとりに奪衣婆と懸衣翁がいて死者の衣を奪うという。」（6）とある。

要するに、「渡り川」は「みつせ川」と同様、冥土を流れる〈三途の川〉を指しているというのだ。つまり光源氏はここで、玉鬘に向かって〈三途の川〉の歌を詠みかけているということになるのである。

だとすれば、それは少々異様な光景ではなかろうか。たとえ玉鬘本人が新郎を好ましく思っていなかったとはいえ、すくなくとも結婚相手が決まり、まがりなりにも幸福の絶頂に

あるはずの若い女性にむかって、〈三途の川〉の歌を詠みかけるというのは縁起でもなく、あまりにもぶしつけな行為だということができよう。もちろん、歌いかけている光源氏自身は冗談のつもりなのだろうが、それにしても場違いの感は否めないのである。

それゆえ、注釈書のなかには、

只川の事歟

三条西実隆『弄花抄』〈源氏物語古注集成〉（7）

わたり川は三途也されとこゝにては只川と見て可レ然歟

三条西実隆『細流抄』〈源氏物語古注集成〉（8）

と記し、ここにいう「渡り川」を「三途の川」のこととは受け取らずに、一般的な「ただの川」だと主張することによって、話題が冥府におよぶのを避ける解釈すらみられるのである。

たしかに、〈三途の川〉を意味する「渡り川」「みつせ川」の語はこの場にはふさわしくないかも知れない。

しかしながら、いや、だからこそ、私にはかえって〈三途の川〉の歌がここにおいて堂々と示されていること自体に大きな意義があると思うのだ。なぜなら、ここ六条院は「根の国・妣の国」を想定してつくられているからなのである。

そもそも、私の考えによれば、ここ六条院は〈記紀神話〉における「根の国・妣の国」すなわち〈死者の国〉を根底にすえて成立した神話世界であり、それを仏教的に言い換えるならば〈極楽浄土〉ということになろう。それゆえ、現世と来世とのはざまには、それらをへだてる〈三途の川〉が流れているのである。

ということは、亡くなった人びとが来世にわたるときにはかならずわたる川であるとともに、逆に、来世から現世に戻ってくる場合にもかならずわたらねばならない川が〈三途の川〉なのである。

いま、六条院に住んでいる玉鬘は鬚黒によって六条院のそとへと奪い去られようとしている。すなわち、玉鬘が六条院を出るということは、六条院という彼岸を去って現世という此岸へとわたってこようとしているのだ。そこで、玉鬘は当然、その境を流れる〈三途の川〉をわたらねばならず、それゆえ、当然、ここ〈死者の国〉六条院において〈三途の川〉の歌が提示されることになるのである。

「渡り川」の語も「みつせ川」の語も、『源氏物語』中この一例のみの用例である。けれども、たとえ一語ではあっても、この語が六条院で披露されるということは、ここ六条院がまぎれもなく〈極楽浄土〉言い換えれば「根の国・妣の国」であることを如実にものがたっているといえよう。

十三　女性を背負うというモチーフ

しかし、この歌で着目すべき点は、ここ六条院が〈記紀神話〉における「根の国・妣の国」であることをものがたるということだけではない。さらにここで重要なことは、男主人公が愛する女性を背に負うというモチーフが共通して描かれている点なのである。

歌をめぐるやり取りをもう少し引用してみよう。

「おりたちて汲みはみねども渡り川人のせとはた契らざりしを

思ひのほかなりや」とて、鼻うちかみたまふけはひ、なつかしうあはれなり。女は顔を隠して、

　みつせ川わたらぬさきにいかでなほ涙のみをのあわと消えなん

「心幼の御消え所や。さても、かの瀬は避き道なかなるを、御手の先ばかりは、引き助けきこえてんや」とほほ笑みたまひて……。

（『源氏物語』「真木柱」の巻、三五四－三五五頁）

〔現代語訳〕「おりたちて……（あなたとは立ち入って親しい仲にはならなかったけれど、あなたが三途の川を渡るとき、まさか他の男に手を取らせようとは約束しなかったのに）

こんなことになろうとは、思ってもみなかったのです」とおっしゃって、鼻をかんでいらっしゃる気配は、しみじみと思いをそそるものがある。女は顔を隠して、

　みつせ川……（三途の川を渡らぬさきに、どうぞして悲しみの涙の川の水脈の泡となって消え失せてしまいたいと思います）

大臣は、「そんな場所で消えておしまいになろうとは幼いお考えというものです。それにしても、その三途の川はどうしても渡らなければならぬそうですから、せめてあなたのお手の先ぐらいは引いてお助け申したいものです」と笑顔をつくられて……。

この〈三途の川〉をめぐるやり取りの背景には、古くから語られてきた俗信の存在が指摘されている。亡くなった女性が〈三途の川〉をわたる際には、はじめて契った男性に背負われてわたるというものである。

たとえば、『地蔵菩薩発心因縁十王経』には、〈三途の川〉をわたる女性について次のように記されている。

　尋初開男、負其女人……（9）
　初て開く男を尋て、その女人を負ひ……

これによれば、亡くなった女性が、死後、〈三途の川〉をわたる際には、はじめて契った男性に背負われてわたると信じられていたことがわかる。

そこで、結局のところ玉鬘とのあいだに実事がなかった源氏は、玉鬘が〈三途の川〉をわたるときには、玉鬘を背負うことはできないため、せめて指の先だけでも引いてわたりたいと冗談めかして述べているのである。

男主人公が愛する女性を背に負うといえば、すぐに思い出されるのが『伊勢物語』第六「芥河」の段（10）である。

在原業平とおぼしき『伊勢物語』の主人公「昔男」は、のちに清和天皇の皇后「二条の后」となる高貴の女性高子を盗み出し、その女性を背に負って夜道をひた走りに走る。芥河という川のほとりまでやってきたところ、雷鳴もとどろき、雨もざあざあと降ってきたものだから、誰もいない倉のなかに女性を押し入れ、自分は「弓、胡籙」を身につけてその戸口を守ることにした。ようよう夜も明けてきたので倉のなかをのぞいてみると、すでに女性の姿は跡形もなかったというのである。

ここにも、男主人公が愛する女性を背に負うというモチーフが示されている。

では、男主人公が愛する女性を背に負うというモチーフの根源は、一体どこに求めることができるのであろうか。それ

を『源氏物語』の作者は、『古事記』の神話だというのである。

『古事記』の神話によると、大穴牟遅神は、須佐之男命が居眠りをはじめたすきに「根之堅州国」からの脱出を決行する。

其の神の髪を握り、其の室に椽ごとに結ひ著けて、五百引の石を其の室の戸に取り塞ぎ、其の妻須世理毘売を負ひて、即ち其の大神の生大刀と生弓矢と、其の天の沼琴とを取り持ちて、逃げ出でし……。

（『古事記』上巻「大国主神」）（11）

〔現代語訳〕大穴牟遅神はその大神の髪を手に取って、その室に椽ごとに結びつけて、五百人かかってやっと引けるほどの巨大な岩でその室の入り口をとり塞ぎ、その妻須世理毘売を背負い、すぐにその大神の生大刀と生弓矢と、天の沼琴とを取って持って逃げ出した……。

大穴牟遅神は、妻である須勢理毘売を背に負って「根之堅州国」を逃げ出したというのである。

『源氏物語』の作者は、男主人公が愛する女性を背に負うというモチーフの原点に『古事記』の神話が位置していることを指摘し、それが〈三途の川〉をわたろうとする女性にも、さらに高貴な女性を盗み出して逃げようとする『伊勢物語』にも大きな影を落としているとみているのである。

さすがに『源氏物語』においては玉鬘を奪い去ろうとする鬚黒大将の背に玉鬘が負われてはいないが、『源氏物語』もまたその系譜の延長線上に位置していると言っているのではなかろうか。

なぜなら、『古事記』と『伊勢物語』と『源氏物語』にはいくつかの共通点が見出せるからである。

たとえば、男主人公によって連れ出されることになる女性がその家の「実の娘」ではない可能性がある点をあげることができよう。

『伊勢物語』で盗み出される二条の后高子は、五条の后順子が暮らす邸の西の対に住んではいたが、もともと五条の后順子の「姪」であって、「実の娘」ではない。同じように、『源氏物語』において奪い去られることになる玉鬘もまた、はじめこそ光源氏の「娘」とされていたが、のちには源氏の「実の娘」ではないことが公言されるに至る。その点で、『古事記』の須勢理毘売は、唐突に登場し系譜にも一切記されていないなど、須佐之男の「実の娘」というには大いに疑問が残る。

このように、〈嫁盗み〉の対象となった女性たちはいずれもその家の「実の娘」ではない可能性が高いのである。

さらに、女性を連れ出す男主人公がいずれも武器にかかわりをもっている点をあげることができよう。

『古事記』の神話における大穴牟遅神は、逃げるにあたって須勢理毘売を背負っただけでなく、「大刀」や「弓矢」といった武器をたずさえている。『伊勢物語』の「昔男」もまた、愛する女性を背に負っただけでなく、「弓」「胡籙」をたずさえていたことがわかる。これは、「昔男」のモデルとなった在原業平が「近衛中将」という武官であったことと無関係ではないようだ。

その点では、たしかに『源氏物語』において玉鬘をさらって逃げる鬚黒からは武器を携帯していたという記述を見出すことができない。しかしながら、鬚黒は、「右大将」という武官の地位にあり、当然、武器と深いかかわりをもっているはずであって、そのことは玉鬘がはじめて鬚黒を目撃した「行幸」の場面においても、鬚黒が武器で身をかためていたこと

で明らかだ。

そのように考えてみるならば、「行幸」の場面において、玉鬘がはじめて実際に目にした鬚黒が武器を携行していたという事実は、ひじょうに重要な表現だったことがあらためてわかる。それは、鬚黒が〈玉鬘求婚譚〉にとって重要な人物であることをもの語るだけでなく、将来鬚黒こそが六条院から玉鬘を奪い去る人物であることを強烈に示唆する表現であったと知られるのである。

『源氏物語』にとって『伊勢物語』からの影響は小さくないが、ことこの場面に限っては、〈記紀神話〉が物語の根底に踏まえられていたとみるべきではなかろうか。しかも、〈記紀神話〉といっても、これらの話は『日本書紀』にはまったく記されていないので、すべて『古事記』の神話に基づいて書かれているのである。

〈死者の国〉から主宰者の目をぬすんで愛する妻を奪い去るという点において、『源氏物語』は『古事記』と見事に一致しているということができよう。

すなわち、『源氏物語』の〈六条院逃走の物語〉の原点には、『古事記』の〈根之堅州国逃走の神話〉が踏まえられていたとあらためて結論することができるのである。

十四　琴の音

⑧重要な小道具としていずれも「琴」が登場している点。

玉鬘を突然奪われ、六条院に取り残されてしまった光源氏は、寝ても覚めても玉鬘の面影が目にうかび、何かにつけて玉鬘のことばかりが恋しく思い出されずにはいられない。

雨がひどく降りつづいてしんみりとした気分のころ、源氏は玉鬘のかつての部屋にお越しになると、当時の様子などがたまらなく恋しくなり、胸の張り裂けるような心地になる。

そんなおり、光源氏はやるせない懸想の思いをまぎらわせるかのように琴を手にとる。

さましわびたまひて、御琴掻き鳴らして、なつかしう弾きなしたまひし爪音思ひ出でられたまふ。あづまの調べをすが掻きて、「玉藻はな刈りそ」とうたひすさびたまふも、恋しき人に見せたらば、あはれ過ぐすまじき御さまなり。

（『源氏物語』「真木柱」の巻、三九二－三九三頁）

〔現代語訳〕あきらめようとなさっても、それがおできになれないので、お琴をかき鳴らされると、あの女君がやさしくお弾きになった爪音を思い出さずにはいらっしゃれない。和琴の調べをすががきにして、「玉藻はな刈りそ」と謡い興じていらっしゃるにつけても、その姿を恋しいあのお方に見せたら、きっと心を動かされるにちがいない御有様である。

玉鬘がいなくなったがらんとした部屋のなかで、源氏は玉鬘のことを忘れようと手すさびに琴を掻き鳴らされる。すると、その琴の響きが玉鬘の爪音をよみがえらせ、かえって玉鬘を思い出さずにはいられないというのである。

ここには、たとえば、二年前の夏、「常夏」の巻において、源氏が玉鬘に和琴の教授をしたことなどが想定されるが、『源氏物語』には玉鬘が琴を奏でる場面そのものは描かれていない。しかしながら、描かれていないからこそかえって、玉鬘の琴の爪音が源氏の耳のなかにいつまでも反響するのである。

じつは、『古事記』の神話にも琴が登場し、「琴の音」が重

要な役割を担っている。

大穴牟遅神は、須佐之男命が居眠りをして油断したすきに、須佐之男命の髪を椽にしばりつけ、妻の須勢理毘売を背負うと、須佐之男命の「生大刀」「生弓矢」それに「天の沼琴」とをとりもって、「根之堅州国」を一目散に逃げ出す。

……大神の生大刀と生弓矢と、其の天の沼琴とを取り持ちて、逃げ出でし時に、其の天の沼琴、樹に払れて、地、動み鳴りき。故、其の寝ねたる大神、聞き驚きて、其の室を引き仆しき。然れども、椽に結へる髪を解く間に、遠く逃げき。

（『古事記』上巻「大国主神」、八三－八四頁）

〔現代語訳〕……大神の生大刀と生弓矢と、天の沼琴とを取って持って逃げ出した時、その天の沼琴が、樹に触れて、大地が揺れ鳴りわたった。それで、その寝ていた須佐之男大神がこれを聞き驚いて、その室を引き倒した。けれども、椽に結びつけられた髪をほどいている間に、大穴牟遅神は遠くへ逃げた。

「生大刀」「生弓矢」とともに「天の沼琴」をたずさえて大穴牟遅神は逃げたが、その際に「天の沼琴」の絃がたまたま樹に触れてしまい、大地を揺るがすほどに鳴り響いたため、期せずして須佐之男命を目覚めさせることになったというのである。

この「天の沼琴」については、「宗教的支配力を象徴したもの」（倉野憲司「古事記」）（12）「宗教的権威を象徴した呪器。」（荻原浅男校注・訳「古事記」）（13）「君主としての宗教的支配力を象徴するもの」（倉野憲司『古事記全註釈』）（14）「神託の呪器。」（西宮一民校注『古事記』）（15）などとその宗教的・呪術的意義が説かれたりしているが、何よりもまず「琴の音」である点で『源氏物語』と同等なのである。

なるほど、「天の沼琴」をたずさえていたのは大穴牟遅神であって、須勢理毘売ではなかったかも知れない。しかし、「琴の音」が鳴りわたったことによって須佐之男を目覚めさせ、須勢理毘売が奪い去られたことを知らせるきっかけとなった点で、「琴の音」は女主人公の存在と一体化していることがわかる。

つまり、『源氏物語』のなかで光源氏が「琴の音」を媒介として玉鬘を想起するという場面の根底には、須佐之男命が「琴の音」によって須勢理毘売の存在にあらためて気づくという『古事記』の神話が踏まえられていたということができよう。

「琴の音」は『源氏物語』と『古事記』とをつなぐ証左の一つなのである。

十五　新たなる正妻

⑨女主人公がどちらも「正妻」になっている点。

鬚黒によって奪い去られてしまった玉鬘は、のちに鬚黒の「正妻」として位置づけられることになる。

事件から二年後、光源氏の四十の賀に際して、玉鬘は源氏に若菜を献上するという大役をおおせつかることとなる。このとき、玉鬘は鬚黒の「北の方」と呼ばれている。

正月二十三日、子の日なるに、左大将殿の北の方、若菜まゐりたまふ。

（『源氏物語』「若菜上」の巻、五五頁）

〔現代語訳〕正月二十三日、その日は子の日なので、左大将殿の北の方が若菜を献上なさる。

ここにいう「左大将殿」とは鬚黒のことであり、「左大将殿の北の方」とは玉鬘のことである。玉鬘は鬚黒の「北の方」として位置づけられているのである。

「北の方」とは、「貴人の正妻の部屋。また、そこにいる妻。もと、寝殿造の北にある対屋のことであるが、転じてそこに住む正妻の称となる。」（中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義編『角川古語大辞典』）（16）「貴人の正妻の敬称。」（大野晋編『古典基礎語辞典』）（17）とあるように、貴人の「正妻」を表わす語である。数ある妻のなかでも「北の方」を名乗ることができるのは、正妻にのみ許された特権だといえよう。玉鬘は名実ともに鬚黒の「正妻」の地位に就いたのである。

『古事記』の神話には、須勢理毘売が数ある妻のなかでも「正妻」として遇することをはっきりと命じている場面がある。

大穴牟遅神を追って黄泉ひら坂までやってきた須佐之男命は、須勢理毘売を背負ってはるかかなたへ逃げ去ろうとする大穴牟遅神にむかって次のように呼びかけている。

「其の、汝が持てる生大刀・生弓矢以て、汝が庶兄弟をば坂の御尾に追ひ伏せ、亦、河の瀬に追ひ撥ひて、おれ、大国主神と為り、亦、宇都志国玉神と為りて、其の我が女須世理毘売を適妻と為て……」

（『古事記』上巻「大国主神」、八五頁）

〔現代語訳〕「お前が持っているその生大刀・生弓矢で、お前の腹違いの兄弟をば、坂の裾に追い伏せ、また川の瀬に追い払って、ささまは大国主神となり、また宇都志国玉神となって、そのわが娘須世理毘売を正妻として……」

ここで注目したいのは最後の部分である。

「……其の我が女須世理毘売を適妻と為て……」

（『古事記』上巻「大国主神」、八五頁）

〔現代語訳〕「……そのわが娘須世理毘売を正妻として……」

ここにいう「適妻」について、諸注は次のように記している。

「正妻・嫡妻。」（神田秀夫・太田善麿校註『古事記』）（18）「「向ひ妻（め）」の義で、正妻のこと。」（尾崎暢殃『古事記全講』）（19）「正妻のこと。字鏡にも名義抄にも嫡をムカヒメ又はモトツメとする。夫に向う意である。」（西郷信綱『古事記注釈』）（20）。

要するに、「適妻」の「適」は「嫡」のことで、「正妻」「本妻」を意味しているというのである。

須佐之男命は、娘を奪い去る大穴牟遅神に向かって、わが娘須勢理毘売をかならず「正妻」にするよう強く求めているのである。

そこで、『古事記』はこの言に添うかたちで物語を展開し、こののち、須勢理毘売は大穴牟遅神あらため大国主神の「適后」となり、押しも押されもせぬ「正妻」として立派に処遇されることとなる。

『源氏物語』もまた、この言に添うかたちで物語を展開していく。

玉鬘と結ばれた鬚黒にはすでに正妻である「北の方」がいた。そのため鬚黒は当初、玉鬘と「北の方」との円満な同居

生活を画策する。ところが鬚黒が、物の怪（け）にやみわずらう「北の方」を嫌悪し、若くて美しい玉鬘にうつつをぬかすにおよんで家庭内不和が勃発、とうとう鬚黒に愛想をつかした「北の方」が子どもたちを連れて実家へと戻ってしまい、正妻にのみ許されていた「北の方」という首座をはからずも明けわたしてしまうのである。

そののち、鬚黒によって奪い去られた妻玉鬘が鬚黒と同居するにいたり、玉鬘は内大臣（昔の頭中将）の娘であり、太政大臣（光源氏）の養女であるなど申し分のない家格の出であることから、名実ともに鬚黒の「北の方」すなわち「正妻」の座におさまることとなったのである。

たしかに、『伊勢物語』「芥河」の段は高貴な女性を盗み出し逃走する点で『源氏物語』と類似した話ではあるものの、結局盗み出された女性は途中で連れもどされ、「正妻」の座につくにはいたっていない。

ということは、奪い去られた女性が夫の家において新たなる「正妻」としてむかえられたという『源氏物語』の物語展開には、娘をかならず「正妻」にせよという『古事記』の神話が踏まえられていたということがわかるのである。

注

（1）阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注・訳『源氏物語』③〈新編日本古典文学全集〉、小学館、一九九六年、三五四頁。

（2）大野晋・佐竹昭広・前田金五郎編『岩波古語辞典』岩波書店、一九七四年、一三九四頁。

（3）中田祝夫・和田利政・北原保雄編『古語大辞典』小学館、一九八三年、一七六六頁。

（4）秋山虔編『王朝語辞典』理想社、二〇〇〇年、四八六頁。

（5）北山谿太『源氏物語辭典』平凡社、一九五七年、七五三－七五四頁。

（6）新村出編『広辞苑』第七版、机上版あーそ、岩波書店、二〇一八年、一二二一頁。

（7）伊井春樹編『弄花抄』〈源氏物語古注集成〉、桜楓社、一九八三年、一四五頁。

（8）伊井春樹編『細流抄』〈源氏物語古注集成〉、桜楓社、一九八〇年、二四二頁。

（9）本居宣長「玉勝間」十の巻〈本居宣長全集〉第一巻、筑摩書房、一九六八年、三〇七頁。

（10）片桐洋一・福井貞助・高橋正治・清水好子校注・訳『竹取物語　伊勢物語　大和物語　平中物語』〈新編日本古典文学全集〉、小学館、一九九四年、一一七－一一九頁。

（11）山口佳紀・神野志隆光校注・訳『古事記』〈新編日本古典文学全集〉、小学館、一九九七年、八三頁。

（12）倉野憲司・武田祐吉校注『古事記　祝詞』〈日本古典文学大系〉、岩波書店、一九五八年、九八頁。

（13）荻原浅男・鴻巣隼雄校注・訳『古事記　上代歌謡』〈日本古典文学全集〉、小学館、一九七三年、九八頁。

（14）倉野憲司『古事記全註釈』第三巻、上巻篇(中)、三省堂、一九七六年、二三三頁。

（15）西宮一民校注『古事記』〈新潮日本古典集成〉、新潮社、一九七九年、六四頁。

（16）中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義編『角川古語大辞典』第二巻、角川書店、一九八四年、四六頁。

（17）大野晋編『古典基礎語辞典』角川学芸出版、二〇一一年、四一〇頁。
（18）神田秀夫・太田善麿校註『古事記』上〈日本古典全書〉、朝日新聞社、一九六二年、二三二頁。
（19）尾崎暢殃『古事記全講』加藤中道館、一九六六年、一四七頁。
（20）西郷信綱『古事記注釈』第一巻、平凡社、一九七五年、五一頁。

（二〇二〇・一・二八受稿、二〇二〇・三・一八受理）

〔抄　録〕

源氏物語と古事記神話（四）

杉浦　一雄

『源氏物語』のいわゆる〈玉鬘十帖〉は、玉鬘を中心に六条院を舞台としてくりひろげられる〈玉鬘求婚譚〉を本旨としている。〈玉鬘十帖〉の掉尾をかざる「真木柱」の巻には、鬚黒大将が光源氏の目を盗んで玉鬘を自邸へと奪い去る〈六条院逃走の物語〉が描かれている。

これまでに私は、『源氏物語』の根底には〈記紀神話〉が深く関与し、『源氏物語』は〈記紀神話〉を源泉として執筆されたのではないかと考えてきた。もしもその発想に基づくならば、六条院を舞台とする〈玉鬘十帖〉の結末にも、その根底に〈記紀神話〉が踏まえられている可能性が高いのではないか。

そこで、ここでは『源氏物語』のなかから玉鬘と鬚黒大将とのかかわりを中心に取り上げ、鬚黒大将による〈六条院逃走の物語〉が、『古事記』における大国主神による〈根之堅州国逃走の神話〉を源泉として造型されたことを明らかにしてみたいと思う。

玉鬘をめぐる『源氏物語』と『古事記』との共通点について以下論述する。

⑧重要な小道具としていずれも「琴」が登場している点。
⑨女主人公がどちらも「正妻」になっている点。